

# 福井県三方五湖周辺における舟と水上交通 －縄文時代～平安時代の出土資料から－

小島 秀彰（若狭三方縄文博物館）

## はじめに

三方五湖周辺域は、若狭地方の中央に位置し、福井県若狭町と美浜町に属するが、滋賀県境と隣接・京都府境と近接しており、古来、これらの地域とのつながりも深い。本稿では、環日本海域に限らず、舟と水上交通の面で、これらの地域との関連性についても触れたい。

## 出土資料（第1・2図）

三方五湖周辺遺跡で丸木舟を出土したのは、鳥浜貝塚（縄文時代前期1艘・後期頃1艘）及びユリ遺跡（縄文時代後晩期9艘）である。各舟に共通する特徴としては、①いずれもつくりが浅い②材質がスギである③当時の湖岸（古三方湖岸）付近で出土していることである。

櫂は、鳥浜貝塚（縄文時代前期）、北寺遺跡（同後期）、ユリ遺跡（縄文時代晩期末・弥生時代後期～古墳時代）、田名遺跡（弥生時代後期～古墳時代）、江跨遺跡（同）から出土した。時代を超えて同一形態の櫂が存続しているが、羽子板形の柄頭は、縄文時代に特有である。また舟形木製品は、田名遺跡（9世紀後半以降）及び角谷遺跡（平安時代以降）で報告されている。

## 三方五湖周辺の水上交通

三方五湖のうち三方湖・水月湖・菅湖周辺は、近世までは、ほぼ淡水域であった。今のところ、出土資料から詳細に論じられるのは、この内水面交通に限られる。当地域の丸木舟の内面は、舷側の高さが16～25cm程度と低く、舟体の割り方が浅い。特に縄文時代後期以降の丸木舟は、舟底をほとんど加工しない丸底のものと、平底のものとが併用されており、後者はより水深の浅い湖沼や河川での利用が想定される（清水編2012）。出土舟による交通もこれらの淡水域に留まっていた可能性が高い。

また、首都大学東京と若狭三方縄文博物館が共同で実施した、丸木舟復元実験（小林・山田2011）での所見によると、適正な定員は、縄文時代前期の鳥浜貝塚1号丸木舟復元舟（丸底）で4名、同後期のユリ遺跡1号丸木舟復元舟（平底）で2名である。前者を実際に漕いでみると、左右にローリングはするものの、湖沼や河川における通常の乗船で、舟内に水が浸入することはなかった。一方、後者は波のない河川において1名で漕いだ場合でも、櫂による水しぶきが舟内に常に浸入するため、遠距離の航行や外洋での利用を想定しにくい形態であると言える。

よって、舟の形態と実験結果に基づけば、縄文時代の三方五湖周辺における出土舟は、内水面交通向きであり、特に後期以降は、近隣での移動に重きを置いていたと想定できる。

一方、弥生時代以降の状況については、実際に利用された出土舟そのものが存在しないため、議論の幅は少ない。平安時代の舟形木製品の形態を見ると、縄文時代のユリ遺跡出土舟から大きな変化が見られないことに気付く。つまり、舟体の割り方が浅く、ほぼ平底で、舷側が低い点が共通している。祭祀に利用された非実用品ながら、実用舟を忠実に模した木製品であることから、これらの形態が縄文時代後期以降、広く内水面交通に用いられた舟の形態であったと推定できる。

一方、外洋に面した若狭湾はリアス式海岸が続く地形である。海岸に近接した場所に分布する遺跡の発掘調査例は少なく、分布調査で確認できるのは製塩遺跡や散布地がほとんどである。一方、海産物が出土するため、間接的に外洋での活動を論じられる内陸側の遺跡として、鳥浜貝塚（マグロ属、マダイ亜科、ブリ属、サザエ等の動物遺体出土）、北寺遺跡（マグロ属出土）などが挙げられる（小島2007）。これらの遺跡や近隣で出土した丸木舟は、先述のように内水面向きであることから、外洋

向きの別の丸木舟や漁港にあたる遺跡の存在が想定できるが、今のところ、これらを伴う遺跡は当該地域では未発見である。古墳時代以降、若狭湾岸には製塩遺跡が多く出現し、古代から平安時代まで遺跡が存続する場所もある。若狭湾岸の小川遺跡(古墳時代)では製塩土器や石錘なども出土しており、製塩を行いつつ、外洋で漁撈も行っていたと考えられる。

近世以降の若狭湾岸では、京都という大消費地を背後に抱え、「京は遠ても十八里」などと言われるように、人手によって一昼夜で鮮魚類を運搬することが可能であった。田名遺跡では、調塩の付札木簡も出土しており、藤原宮跡や平城宮跡でも、三方郡関係の付札木簡が出されている（田辺編1988）。少なくとも製塩の始まる古墳時代以降近世に至るまで、若狭地方と近畿地方とを結ぶ海産物流通があったと考えられ、船（舟）は海から漁村までの海産物の移送という最初の役割を担っていたと考えられる。ただし、塩を使った海産物の保存・貯蔵法の導入以前は、基本的に地産地消を基本とした生業・運搬に船（舟）が利用されていたと推定される。

#### 隣接地域との関係

琵琶湖及び内湖を有する滋賀県域では、縄文時代の丸木舟が30艘以上と、日本最多の出土数を誇る（財滋賀県文化財保護協会編2007）。分布的には、湖北、湖東、湖西に拡がり、特に内湖が存在した湖東・湖北方面からの出土例が多い。時期的には、縄文時代中期に出現し、後晩期にその出土例を増加させる。利用場所としては、当然のことながら内水面に限定されている。なお、丸底の舟と平底の舟、横帶を持つものと持たないものとが同時期に併存するのは、若狭地方と共通している。

京都府では、舞鶴市で1例、向日市で2例の出土が報告されている（財滋賀県文化財保護協会編2007）。特に舞鶴市浦入遺跡出土舟（縄文時代前期中葉）は若狭湾に面した内湾の砂浜からの出土であり、外洋航行を目的とした舟として貴重な出土例である。最大幅約90cm、舷側の高さ40cmを測る。現存長は約500cmであるが、復元すれば800cm以上となり、内水面用の丸木舟とは規模が全く異なっている。ただし鳥浜貝塚の舟とよく似た形態であり、少なくとも縄文前期中葉の時点で、同形の舟が若狭湾近隣で外洋交通に利用されていたことの証左である。

#### おわりに

三方五湖における内水面中心の水上交通は、近世以後も、自動車による流通がスタートするまで、鉄道と組み合わされた形で継続していた。例えば、湖岸での農作業に舟を使い、渡船という形で人々の足となり、漁獲物、生産物、食料品、日用品等の一切の輸送手段となっていた（三方町立郷土資料館編1987・三方古文書を読む会編1990）。三方五湖周辺域では、重量物も問題なく運搬できる乗り物として、永い間、舟が有効に機能していたのである。

#### 【引用・参考文献】

- 小島秀彰 2007 「外洋性漁撈活動の存在へ評価－鳥浜貝塚における縄文時代前期の「痕跡」の検討－」『縄紋時代の社会考古学』 同成社
- 小林加奈・山田昌久 2011 「縄文時代丸木舟の復元製作実験」『人類誌集報2008・2009－遺跡資料の人類誌・実験考古学による人類誌－』 首都大学東京人類誌調査グループ
- 財滋賀県文化財保護協会編 2007 『丸木舟の時代－びわ湖と縄文人－』 サンライズ出版
- 清水孝之編 2012 『ユリ遺跡－舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査－』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 田辺常博編 1988 『田名遺跡』 三方町教育委員会
- 三方古文書を読む会編 1987 『三方歴史ブックレット② 三方五湖の漁業（上）－久々子湖と氣山川・浦見川－』 三方古文書を読む会・三方町立図書館
- 三方古文書を読む会編 1990 『三方歴史ブックレット③ 三方五湖の漁業（中）－三方・水月両湖と鰐川－』 三方古文書を読む会・三方町立図書館

